

松 山 大 学 論 集
第 24 卷 第 3 号 抜 刷
2 0 1 2 年 8 月 発 行

対面的コミュニケーションについての考察（Ⅳ）

—— 竹内レッスン：体験と省察に基づいて ——

国 崎 敬 一

対面的コミュニケーションについての考察（Ⅳ）

—— 竹内レッスン：体験と省察に基づいて ——

国 崎 敬 一

序 言

前論文では、Bさんとの出会いのレッスンの後半部の報告とそれに関する省察、および、その体験とそれについての竹内先生のお話と示唆に基づく、私なりに案出した対面的状況における人との対し方の工夫（換言すれば、英語でart）、そして、再度試みたAさんとのレッスンにおける驚くべき体験について報告した。

本論文では、レッスンの後に私を訪れた喜ぶべき不思議としかいいようがない体験、と私にもたらされた人格の変容について記し、それについて考察をくわえ、省察を行いたい。

VII レッスンの後一すでにいとしくある

(29)

このように私は、Aさんとの2回目の出会いのレッスンで、〈消して開く対し方〉を試みて驚くべき体験をしたのだが、その後私に、様々の変化が訪れた。このあとのレッスンでも、家に帰ってから。そして、この変化は、今も続いている。

(30) すでにいとしくある

最初の変化は、私のレッスンの直後の出会いのレッスンを見学しているとき

に起きた。次のレッスンが始まった。中年の女性Cさんと若い女性Dさんとのレッスン。私は他の人たちと一緒に見学者席から見ていた。そのとき、私はふと思いついて、〈消して開く〉対し方で二人を感じるようにした。すると、私にとって驚くべきことが起きた。

Cさんは、一日目私が、朝一番の〈ゆらし〉のときに、相手をお願いした方である（竹内レッスンでは、初心者は〈ゆらし〉の相手を誰にでもお願いできるようにになっている。相手は断ることもできるが）。母のような、穏やかな、やさしく信頼できる方という印象だったので、お願いしたのである。基本的に初心者に配慮したゆらし方をしてくださったのだが、第一印象からするとゆらし方がやや強いように感じた。もちろん、これは単に私が〈ゆらし〉の仕方を知らなかったため、予想したより強かったのに驚いただけだったのかもしれない。ともあれ、そのときの私にはそう感じられたのである。

また、私がCさんをゆらしたときも、私が的確なゆらし方をするようにいろいろ言われた。わたしは、ゆらしてもらうときは、相手にゆだねるものだと（勝手に）想定していたので、しっかりと注文される＝求められる方だと思ってしまった。もちろん、これも初心者の私が多分に適切なゆらし方ができないので、一つ一つ教えられたのであろう。それを私が、〈人にいろいろ求める人〉と受け取ったのであろう。ともあれ要するに、私にはCさんは〈相手をやや強く扱い、相手に求める人〉ととらえられていたのである。それで、二人のレッスンを見ているときは、私にとって、見ていてややしんどく感じる方であったのだ。

一方、Dさんは、いい感じの方だったが、緊張した表情に世界に対する怯えと不安が現れているように見える方だった。この方も、私にとって見ていてややつらい方だったのだ。

二人が出会いのレッスンを始めた。レッスンの進行は、よく憶えていないが、大体こんなふうだったと思う。Cさんは、相手を見きわめるような視線で近づいていった（この「見きわめるような視線」というのは、あとで竹内さん

が言われた言葉である）。Dさんは、不安な、探るような態度で近づいていった。なかなか、すんなり二人が手をつなぐという具合には、ならなかった。CさんがDさんの手をとって、〈さあ、そんなにびくびくしていないで、身体を動かして遊ぼう！〉と言うように、ブンブンと取った手を強く振って遊び始めた。Cさんは、〈それはちがう！〉という感じに手をふりほども、はねのけた。……という具合で、やや陰しい、見ていてつらい雲行きで、進行していった。〈求める人〉と〈つらそうな人〉の、見ていてきついやりとりが目の前で展開していた。通常の私にとっては、もう見ていられない人、見ていてつらい人、なのである。すると、目をそらしたくなるのだ。

だがこのときは、ふと思いついて、二人に向かい、〈心を消してからだを開く対し方〉をやってみた。すると、からだの前面がちりちりし、ふたりそれぞれが、目の前に

いきづいて—いいなあ

であった。〈求める人〉〈つらそうな人〉が消えたのではない。それはそれでありながら、それもふくみつつ、そのまま、いきづいていていい、なのであった。そして、さらに、二人はそれぞれ、

すでにそこにいとしくある

のであった。

私が二人を知覚して、それからその二人に対して [いとしい] という思いを注ぎ込んでいったというのではない。二人が見えた瞬間、〈二人はすでにいとしくある（在る）〉のであった。〈私が二人をいとしく思っている〉のではない。〈二人は、端的にそこにいとしくある〉としか言いようがないのである。言い換えれば、そのような体験世界に入ってしまったといってもよい（*）。

(*) [無上の喜びの影響]

このとき、そしてこのあとの[帰り道]でも、なぜ〈ひとがいた〉という状態になったとき、〈ひとがすでにいとしくある〉という事態が出現したのであろうか。(不思議な現象なので)本当のところはよく分からないが、今のところ次のように考えている。

おそらく〈消して開く〉で対すると、からだ=いのちが日常世間的自我の殻から抜けだし、他のからだ=いのちと直^{じか}につながり、直に感じるようになる。そして、同じからだ=いのち同士つながっていることを感じると、それが〈いとしくある〉として現れるのではないだろうか。

ここで、この〈いとしくある〉という事態の出現に、(7)で述べた、Bさんに抱きしめられて、恋に落ちていたことと、無上の喜びが生まれていたことが影響していないかどうか、検討しておいた方がよいと思われる。

まず、抱きしめられて生まれた恋のほうはどうだろうか。相思相愛的な恋の高揚感につつまれているとき、人はよく会う人みなが幸せに美しく輝いて見えるものだ。「清水へ祇園をよぎる桜月夜 今宵逢ふ人みなうつくしき」(与謝野晶子)という歌は、それを見事に描いている。私もそういう経験がある。Bさんに抱きしめられたあと私は、独り相撲ではあるが、そういう恋愛気分がポーッととなっていた。この高揚感が相手に貼り付けられて、〈いとしくみえたのではないか。こういう疑いがある。だが、結論を言えば、この影響で〈いとしくある〉と言う事態が生じたとは言えないと思う。というのは、第1に、恋のとき逢う人が〈幸せで美しい〉のは、その人たちも恋をしているような感じで〈幸せで美しい〉のであり、〈いとしくある〉ときの〈いとしい〉とは質が違うからである。第2に、私の場合、この片恋が終わったあとでも、人に〈消して開く〉で対すると、〈いとしくある〉という事態が出現するからである。

だが、抱きしめられて無上の喜びが生まれていたことの方は、〈いとしくある〉という事態の出現に影響を与えたのではないと思われる(それが主原因というわけではないが)。というのは、第1に、彼女に抱きしめられたとき、私は、今ここに生きている、生きようとしていること自体で愛され承認されたのである。目の前のひとが〈いとしくある〉のは、そのからだ=いのちと直につながり、直に感じるようになり、同じからだ=いのち同士つながっていることを感じるということの現れのように思われる。それが、からだ=いのちがからだ=いのちを信じ愛し承認しているということのかたちであるようなのだ。こういう意味で、抱きしめられたこと、そして無上の喜びは、〈いとしくある〉という事態に、通ずるものであるようだ。だから、影響を与えたのではないかとと思われるのである。第2にこの喜びは、片恋が消えたあとも、私のからだ=いのちにおいて残っており、その後の〈いとしくある〉という事態の出現の土台になっているのではないかと思えるからである。

というようなわけで、〈いとしくある〉の出現をもたらしたのは、本質的には〈消して開く〉態度によって〈ひとがいる〉事態になったことであらうが、それに、抱きしめら

れ愛をもってこの世の一人前の男＝存在として承認されたこと、そしてそれによって生まれた無上の喜びが影響を与えていると今は考えている。

(31) 帰り道にて

自宅への帰路、停留所でバスを待っていた。数メートル先に、一人の女子高生がバスを待っていた。かったるそうで、ややふてくされたような風情。^{ふぜい}〈近年よくみるような女子高生〉とみえた。今までであれば、〈あまり見たくないもの〉として、視線をそらすのであるが、このときまた思いついて、その子に向かい〈消して開く〉で感じる、をしてみた。すると、そこに

ひと がいた

のである。そして、それはそこに

いきづいており、すでにいとしくある

のであった。また、〈いとしく在る〉からといって、〈かったるそうでふてくされている〉のが消えたわけではなく、それはそのままそうでありながら、それも含んだ彼女そのものが、〈そこにいとしく在る〉のであった。

そして、からだの前面がちりちりしていた。

Ⅷ その後の日々―祝祭と喜び

(32) 朝の挨拶

家に帰ってから日々の暮らしのなかでも、小さな驚きが続いた。帰って2、3日後、朝の犬の散歩で、近所を歩いていた。向こうのほう、一軒の家の庭に夫婦がいて、草花に水をやっているようだった。

私は散歩のとき、数年前から、私の住む団地内で会う人にはつとめてこちらから挨拶するようにしていた。顔は見知っているが、話をしたことはないの
で、知り合いというわけではない人たちに対してである。ただ「おはようございます」とか「こんにちは」とかと言うだけだが。女性はほとんどが挨拶を返

してこられる。しかし、男性はまず返ってこない。全く想定していないことが起きて戸惑っているふうである。その家の場合は、奥さんのほうも人見知りなようで、返事が返ってくることはあまりなかった。男性のほうは、私が挨拶すると、私の挨拶がなかったかのようにしておられた。だから、いつもその家の前を通るとき、なんとなく通りにくく、挨拶しにくいのであった。ときには、挨拶をせずに通りすぎていた。

その朝、遠くから二人をみかけたとき、思いついて、〈消して開く〉の態度にして歩いていった。すると、私が挨拶する前に、男性のほうから「おはようございます」ということばがやってきたのである。続けて、女性からも。これには驚いた。

次の日、同じようなことがあった。家からだいぶ離れた通りで、顔もほとんど見知っていない奥様方が3人立ち話をしておられた。私は、こういう「中年の奥様方」がかたまっておしゃべりしておられるところを通るのが、特に苦手なのである。そそくさと通り過ぎるのが通例であった。また、向こうから挨拶がくることもなかった。しかし、このときは思い立って、〈消して開く〉の態度にして歩いていった。すると、一人の奥様が向こうから、こちらを向いて、「おはようございます」と言われたのだ。これも驚きだった。すこし小躍りしたくなるような喜び。

おそらく、そのときの私は、話しかけやすい雰囲気になっていたのだろう。あるいは、竹内さんの言葉で言えば、私のからだ＝いのちが相手を〈呼んでいた〉のかもしれない。

(33) 人と会うとき

先に述べたが、私は正対し相手の目を見て話すことが、ひどく苦手だった。その理由も先に述べたが、相手が本当はどう思っているかを相手の目から読み取れるのが怖かったからであり、私が相手について本当はどう思っているかを私の目つきから読み取られるのを恐れていたからであった。だからこういうと

きは、ときどきちらっと相手の目を見るだけで、だいたい相手を見ないで話していた。

私がたどりついた〈消して開く〉態度は、このような難儀^{なんぎ}な状況を、ずっと楽にしてくれた。目を見て話すことがかなり楽にできるようになった。この態度でいると、〈思う〉を止めている、つまり何も思っていないから、思いを読み取られることもない。かくして、自分の本当の思いを読み取られないか心配することもなく、かなり楽に相手の目を見ておれるようになったのである。

また、私は人と黙って一緒にいることが苦手だった。黙って話すこともせず、ただずーっと人のそばに居るということは、苦手を通り越して、困難なのであった。こういう状況になると、黙って居つづけることに耐えきれない気がしてくるので、沈黙を避けるため、次々と話題を出してひたすらしゃべり続けるのだった。たぶんそれは、相手への思い（例えば、重要なものでは、相手を好きか・嫌いかや認めているか・認めていないかなど）が出てきて、そういう思いが煩わしくなり、居づらくなる、また、そういう思いが相手に悟られるんじゃないかと心配になって、いたたまれなくなるというようなことではないだろうか。

家に帰ってからは、人と会うとき、〈消して開く〉の態度でいるようにした。「心 mind」の「思い」でつき合うのではなく、いいかえれば、「自分が相手をかくかく思う」・「相手が自分をかくかく思う」でつき合うのではなく、ただ、くいまここで からだで めのまえのからだを かんじて一いる（かんじるままに一いる）〉ようにした。すると、ずっと楽にそばにいられるし、黙ったままでいることもできるようになった（*）。

（*）また、一般に私は人とずいぶん楽につきあえるようになった。相手にどう思われるか・どう見られるか、または、私が相手をどう思うか・どうみるかは、実はからだ＝自己という真の人間存在にとってどうでもいいことで、全然本質的なことではないということがわかったからだ（というのは、そういうことは、日常世間的自我としての私とあなたが mind でやりあっているだけのことだから。言い換えれば、実体のない影のようなもの

で、相手にしないで放っておけばよいものだから)。

(34) 花, 木, 空

・[花]

〈消して開く〉態度は、自然に対するときにも、変化をもたらした。散歩のとき、一軒の家の垣根に濃い青紫の朝顔が咲いていた。好きな色合いであり、好きな花であった。ときどき、そばによって、[きれいだなー]と眺め、愛^めでていた。そのときも、そばによって眺めはじめたが、〈消して開く〉で感じてみようと思いついて、やってみた。すると、そこに、

はな があった

のである。そして、〈はながきれい〉は、〈はながあることに ふくまれて ある〉ようであった。また、それまでは「花のきれい」はあった、あるいは「きれいな花」はあった。しかし、上のようなあり方では、〈はなはなかった〉と言うしかないだろう。おそらく、それまでの私は、その朝顔のうち私が好きなところ、自分がきれいだと思うところだけを、愛玩するようにせまき取りにいくようにして、「花のきれい」を愛でていたのだろう。あくまでも私の世界であったのであり、そこにいまこの 〈そのはなそのもの〉は存在していなかったのだ。なんと悲しい世界を生きてきたことか、そして、今はなんと喜びに満ちていることか、と思った。

・[木]

散歩のとき、ときどき眺めのいいところを歩く。私の住まいは瀬戸内海の見える高台にある。その高台と海との間に小さな丘があり、その丘の向こうに海が見える。その丘に一本の大きな木がある。ある日高台を散歩していると、その木が午後の斜光を浴び風に揺れて立っていた。

しばし、見とれていたが、思いついて〈消して開く〉で対してみた。すると、〈圧倒的に そこに 木 があった〉。全世界・全宇宙を背景にして私を圧倒す

るような存在感で、浮き彫りレリーフのようにこちらへグッと浮き立って、在った。浮き立つといっても、宇宙のなかでその木だけが孤立して存在しているというのではなく、全宇宙を代表して、「神が細部に宿る」ように、大げさに言えば全宇宙がその木に収斂^{しゅうれん}して顕現^{けんげん}するかのよう^にに、在った（と体験をした）。

一方、この対し方をすると、木がグッと圧倒的に存在してくると同時に、（私の）からだ^{からだ}がその木が存在しているのと同じ全世界・全宇宙へグッと出て行った、expose 曝^{ばく}されていった（と体験をした）（＊）。

（＊）expose の語源は、[ex- 外へ + -pose 置く] である（ジーニアス英和大辞典）。何が何から出て、外に置かれていったのだろうか。おそらく、この場合、からだ=自己（self）が「私=世間的な自我」というシェルターから（木と共属する全宇宙へと）出て行ったのだろう。

からだの前面がちりちりした。そして、息が詰まった。

・[空]

この頃、ゼミの学生とゼミ旅行で別府に行った。泊まった杉の井ホテルに広大な屋上露天風呂があった。ホテルが別府を見おろす高台にあり、建物が高層なので、屋上の露天風呂は空に突き出すようだった。その露天風呂はいくつもの広い浴槽（一つ 20 畳ほどもある）が棚田状に並んでいるものであった。客が少なかったので、大きな浴槽にたった一人だった。そして、人目がないので、縁^{ふち}に頭をのせて身体をゆったり大の字にのばして浮かんだ。おーっと、全天の空。からだはゆるゆるとお湯に溶けるよう。あ〜、極楽、極楽。

空が桜色を帯びてきた。一片の雲が薄紅色に輝きはじめた。そのとき思いついて、その雲へ向けて〈消して開く〉で対した。すると、雲と空が圧倒的に浮き立ち、からだの前面がちりちりし、そのうち、からだは全天の雲空、全天の宇宙と交わり溶け合いはじめた。陶然^{とうぜん}とし、恍惚^{こうこつ}とした。一種 ecstasy の瞬間

が来た（＊）。

（＊）[ecstasy]

ecstasy の語源をみると（Oxford Dictionary of English）, [ec- 外へ + -stansy 置く], そして, ekstasis（希）=standing outside oneselfと書いてある。これを参考に考えると, 風呂に入るため服を脱ぎ裸（ただの生身のからだ）になったとき, まず一段, 「裱」つまり「私=日常世間的自我」の殻を脱いでただのくからだ=自己（self）になっていたのだ。次に, 風呂につかって身体がゆるゆるにリラックスしたことで, もう一段からだ「殻」から抜け出していた。最後にく消して開くをすることで, ほとんど「殻」が溶け去りなくなって「殻」のそとに生身のからだのでてしまったということなのだろう。そして, そのからだ=自己が, 宇宙=圧倒的な他在と直接交流して直につながった=溶け合ったことで, ecstasy（恍惚状態）がもたらされたのではないだろうか。本当のところは, よく分からないが。今後, 探究していきたいと思っている。

(35) 演奏会

この年の11月の末頃, 顧問をしている軽音楽部の定期演奏会があった。ビッグバンドジャズの演奏である。ある曲の途中でふと思いついて, く消して開くの態度を試みてみた。つまり, 耳で聴かず, からだ全身でひたすら受信するようにした。すると, 身体の上半身, 特に腹のあたりが, ドラム・リズムギターのドッドドッドという強烈な打拍に共鳴するように, ピクッピクッピクッと動くのだ。もちろん, 前面がチリチリ, ジジジジしていた。これまでも, 乗りのいい演奏を聴いていて, 思わず肩を揺すってしまったり, 膝でリズムを刻んでしまったりすることはあったが, 全く受動的にしていって腹が勝手にビクビクうごくというのは, 初めてだった。驚いた（＊）。

（＊）これも皮膚=からだに直に音を感じているということを示しているのではないだろうか。

また, 古楽演奏の第一人者であるアーノンクールによると（AERA, 2006.1.16, p.7, 朝日新聞社）, 13～14世紀の「聴衆は音楽を聴いて感情が高まると, 床に身を投げ出した, 着ている服を引き裂いたりすることがある」というのだ。彼はこれを古楽器の音が現代のものと違って雑音を含むことに帰しているが, 私は当時の人々が現代人と違って少なからず皮膚=からだでも聴いていたからではないかと考えている。

(36) 展覧会

・[モネ展]

翌年（2007年）5月に、東京でモネ展を見に行った。六本木にできた国立新美術館。モネは、フェルメールと並んで、私の大好きな画家である。いい絵がたくさん来ていた。このときも、〈消して開く〉態度で絵に対してみた。この態度をとるときは、グラーっとし口がポカーっと開く。どの絵の前にも大勢のお客がいたので、なかなかやりにくかったし、集中するのが難しかったのだが、なんとかやってみた。すると、いくつかのいい絵の前で、至福にからだ＝いのちが泣くような圧倒的な感激が訪れた。

3. 日傘の女性。18. ジュフォス、夕方の印象。29. マルタン岬から見たマントンの町。33. バランジュヴィルの漁師小屋。36. ポール＝ドモワの洞窟。53. サン・ジョルジョ・マッジョーレ教会から見たドゥカーレ宮。58. ポプラ並木。61. ジヴェルニーの積みわら、夕日。63. 積みわら、夏の終わり、朝。など

感激の極致だったのが、「29. マルタン岬から見たマントンの町」であった。地中海沿岸、コートダジュール最東端にあるマルタン岬に立ち、海をはさんでマントン町とその背後の巨大な山塊を望んだときの風景を描いた絵である。画面下の前景（画面の3分の1を占める）はマルタン岬の海辺で、その中央に赤茶色の土肌と左に草地・花々、中景（3分の1）は左手に濃緑の木の茂みと右手に細く海、遠景（3分の1）に対岸の巨大な山塊とその下に小さくマントンの町が描かれている。筆太で荒々しくぐいぐいとしかし的確に描くタッチ。以前の私の見方で見ると、色が鮮やかでエネルギッシュな絵という程度で、取り立てて感動するような絵ではなかったと思う。

しかし、このときは〈消して開く〉で見た。すると。手前の〈赤茶の土が、圧倒的にそこにのたうって在る〉のだった。原始時代、マグマが地表を突き破って地上にうねりだしてきたその瞬間に遭遇しているようだ。そして、〈向こうの巨大な山塊が、圧倒的にうねり聳えて在る〉。マグマがわき上がり、盛り上

がり、うねり、身もだえして武者震いしているようだ。大地・マグマの原始的なエネルギー・躍動・鳴動そのものが在った。モネが描いているとき〈現前していた〉世界そのものに、こちらが〈現前している〉という思いがあった(*)。

(*) 現前する：

〈消して開く〉で相手に対したとき、相手が今そこに直に現前して存在しており、同時にこちら(からだ=自己)が同じ世界に出ていって、相手に現前している、という事態になる。通常、「現前する」という言葉は、「何かが私に現前する」という使い方をするようだ。「私が何かに現前する」という言い方は、あまりみかけない。しかし、私が体験しているこのような事態を表現するには、「こちらが相手に現前する」という言い方をせざるを得ないのである。相手とこちらが相互に直に(**イデア=観念／表象** といった媒介がつくる膜によって隔てられることなく)つながるという事態なので、相互に現前すると表現するのが、ぴったりなのである。このような破格の言い方をしばしご容赦いただきたい。

土、山塊は圧倒的な美しさに輝いていた。からだの前面はジジジジした。息がつまった。からだ=いのちが喜びに打ち震えるような圧倒的な感応は耐えきれないほどで、とてもいたたまれない、だが離れられないのであった。

すべての絵に対してこうなるのではない。次のような条件を満たす絵でなくてはいけないような気がする。

1) モネが絵を描いたとき、モネそのものと目の前の世界そのものとが相互現前していたこと。

2) その世界そのものをモネがキャンバスに描き込んでいくのだが、モネができあがった絵を見たとき、自分が現前していた現実の世界に絵を通じて再現できるところまで描き込みきったと納得できたと思われる絵であること。

また、周囲のおしゃべりや動きに邪魔^{じゃま}され、そちらに気が散り、その絵への集中が充分深まることができない場合は、このような感動は訪れないのであった。また、絵のタッチが見えてしまうと、モノとしての絵そのものが見えてしまい、モネが現前していた(であろう)世界へと現前できず、このような感動はないのであった。

・[フェルメール展―牛乳を注ぐ女]

フェルメールの「牛乳を注ぐ女」を見に行った（同じく国立新美術館）。展示の仕方がよく、ちょうどいい位置からゆっくりとく消して開くく見方で対することができた。ジャスト・ポジションでく消して開くくで対する。集中が深まり、周囲が消える。すると、その女性の全体が、圧倒的に極限的に美しくそこに輝きはじめる。神々しく美しく、女神のように輝きはじめる。からだの前面はじんじんとし、その神々しき女性・世界と陶然・恍惚と交わっているよう。耐えられないほどの至福の喜びにふるえるよう。もう耐えられない、でも離れられない。あまりのことにいのちがふるえ泣くような感動、であった。

(37) あいせるようになった

このように、出会いのレッスン、そして、く消して開くく対し方によって、いくつもの祝祭と喜びが訪れた。今も訪れている。しかし、私にとって、もっとも深く重大な変化が訪れた。妻を、あいせるようになった、のである。そして、それまで妻に「あまり愛されていない」、「本当には愛されていない」と思っていたのが、すでにあいされていたことがわかった、のである。

思い・考えを消して、思い・考えで「愛そう」としたり、「愛されよう」としたりすることをやめて、ただただ、いまここで、からだで目の前のからだ＝相手を感じるようにした。すると、相手はそこにすでにいとしくある、のだから、自然に相手がいとしいのは、水の流れを止めようがないように止めようがないのである。そして、そのうちになぜか知らずわかったのである。ああずーっと前からあいされていたんだ（*）。

（*）以前の私の「愛する／愛されている」と、今のくあいしている／あいされているくは、全く別のことであるように思われる。以前の「愛する」は、社会的自我としての私が mind で「愛そう」とし、「愛されたい」と思っていたのではないだろうか。「愛」というアイデア（観念／表象）で「愛そう」とし、「愛されたい」と思っていたのではないだろうか。だから、「自分は相手を本当に愛しているのだろうか」と悩み、また「相手に本当に愛さ

りたい」と「本当の愛」を求め、「本当に愛されているのだろうか」と苦悶^{くもん}していたのだろう。（——このアイデア（観念／表象）は、おそらくヒトが言語で生きようになり、そして言語表象と合体した感覚で生きようになって、生じてきたものではないだろうか。）

それに対して、今の〈あいしている〉は、からだいのち=私が、〈いまをいきる〉において、からだ=いのちで、からだいのち=他者を〈あいしている〉のではないだろうか。

〔補遺〕

原稿を読み直している合間に、プーバーの「対話」（『我と汝・対話』所収、植田重雄訳、岩波文庫、1979）を読んでいたら、〈消して開く〉の態度やそのときに訪れる体験に似たことが書いてあるのに気づいた。

「第一部 記述」の「原初的記憶」（pp. 173-174）。プーバーは彼が何度も見た「二重の叫びの夢」を物語る。私は「原始的な世界」にいる。突然、異常な出来事がふりかかる。例えば、野獣が私の腕の肉を喰いとり、私はやっとの思いでふりはなす。…私は立ち止まって叫ぶ。するとどこか遠くの方から別の叫びが起こってくる。応答の叫び。最後にこの夢を見たとき、私は初めて応答の叫びを待ち受ける。だが、応答は起こらなかった。しかし、何かがわたしに生じたのだ。

いわばそれまでわたしは耳を通じての聴覚以外には、この世界からはいつてくる通路はなかったかのように思うほどであったが、今や直接的にさまざまな感覚、それぞれの器官を身につけている赤裸々な存在であることが自分で分かったので、一切のものを感覚、知覚で感受しようとして遠くの方にまでわたしは自己を開放したということである。すると、わたしの身近なまわりの大気から、声とはならない応答がやってくるようになった。本来この応答はやってきたのではなく、そこに存在していたのだ。この応答は——おそらく、そう説明してよいと思うが——私の叫びが起こる以前から、そこに存在していたのだ。それはそこに存在していたし、今も存

在しており、この応答にたいし、わたしが自己を開放したので、感受されるようになったのである。この応答を、以前のどの夢の応答の響きよりも完全に感受するようになった。何によってこれを感じてきたかを語るとすれば、わたしの身体全体の毛孔でもってといわなければならない。

〈聴覚以外の・赤裸々な存在のもつ一切の感覚で感受する〉というのは、私の場合の〈消して開く〉態度における〈目で見るのでなくからだ全体でみえるようにする〉というのと似ている。〈感受しようとして遠くの方まで自己を開放する〉というのは、〈世界へとからだを曝すように開く〉というのに似ている。〈自己を世界へ開放すると応答が、すでに存在していたというように、感受される〉というのには、〈すでにそこに（ひとが）いる〉という現前の仕方と似ているところがある。そして、驚きなのは、〈この応答は身体全体の毛孔でもって感受されるといわなければならない〉という箇所である。私はからだを開くとき、〈全身の毛孔が開くような感じがする〉という感覚をもっていた。ところがブーバーも〈全身の毛孔〉という言葉を使っているのである。驚きである。自己を世界へ開くというのは、やはり皮膚的に開く、いいかえれば皮膚的存在としての自己を開くということなのだろうか。

神秘的に聞こえるといけないと思って本文には書かなかったが、私自身、自然の中を歩いているとき、木に向かって〈消して開く〉で対し木へと志向すると、木がこちらへ語っている、という体験が何度か訪れたのである（もちろん、語るといっても、言葉で細かなことを言っているのが聞こえるというのではない。私と木のからだ＝いのちの呼応、響き合いが起きておりそれが、木が私に語っている、と言うしかないようなかたちで感受されるということだろう。あえて言葉にするなら、「こうしていきっているよ。君もそうやっていきっているね」といったことを語っているとでもいえばいいのであろうか。）これも、〈自己を開放し、全身の感受性を開くと、応答が感受される〉というのと似ているのである。このようにさまざまな点で、ブーバーの体験と似ているところがある。

これは偶然の類似だろうか。関連があるのではないだろうか。大変興味深いことである。探究していきたい。

参 考 文 献

- 竹内敏晴, 1988, 『言葉が劈かれるとき』, 筑摩書房
1990, 『「からだ」と「ことば」のレッスン』, 講談社